

埋文センターニュース

第21号

2005.3.31

津市埋蔵文化財センター



聖治城跡第2次調査区（上か南）

峯治城跡（第4次調査）～最近の発掘調査から～

1. はじめに

峯治城跡は、津市北部の志登茂川下流域を一望する丘陵の突端に位置します。『埋蔵文化財センターニュース』第11号(2000.3.1)でもお伝えしたとおり、これまで3回にわたって行われた発掘調査の結果、峯治城跡は津市内で最大規模の中世城館であることが判明しています。

今回の調査区は第3次調査区の北側に位置し、峯治城跡の最終の調査にあたります。第3次調査でⅡ郭と呼んだ郭の残りの部分と、その北側に位置する小規模な郭を中心に約300㎡の範囲の発掘調査を実施しました。

以下、今回の発掘調査で確認されたことを中心に述べてゆきたいと思います。

2. 峯治城跡の位置と周辺の状況

峯治城跡の位置は、志登茂川と安濃川にはさまれた標高40m前後のなだらかな丘陵で、この丘陵上には弥生時代以降の遺跡が数多く確認されています。

伊勢国司北畠氏と国人領主長野氏の勢力下にあった中世後期の津市周辺には、安濃川流域で最大規模を誇る安濃城跡をはじめとして、多くの城館が築かれます。今回調査を行った峯治城跡の周辺には、同時期の城館とし

て西側の近接する場所に上津部田城址が、やや離れて渋見城跡があります。上津部田城址は、その位置関係や規模の大小から峯治城跡と「本城－支城」の関係にあったとも考えられる城館です。また、渋見城跡は峯治城跡と同様、深くて幅の広い堀と土塁を巡らせた大規模な城館です。

津市の南部では、海岸線に最も近い丘陵の突端に垂水城跡があり、文献や絵図などから北畠氏側の城館にあたると推定されています。垂水城跡からの眺望は非常に良く、敵を監視するのに絶好の位置にあることから、この城は北畠氏の最前線基地のような役割を果たしていたのかもしれません。また、雲出川北岸の雲出島貫遺跡では、中世城館の初現的な形態となる11～12世紀の居館が調査され、わが国の城郭史を考えるうえでも注目される発見がありました。

3. 検出されたおもな遺構

排土を搬出する都合上、Ⅱ郭とⅢ郭の調査を先行させ、終了後にⅥ郭の調査を行いました。その結果、約300㎡の調査区の中で、階段状に連続する郭を検出しました。

Ⅱ郭 県道（津・関線）部分の第1次調査の第Ⅳ郭に相当するもので、第3次調査では



主要中世城館位置図



第4次調査区（白丸内）

峯治城跡で最も大きな掘立柱建物（4間×2間）が検出されています。今回調査したのは、第1次調査区と第3次調査区にはさまれた20㎡ほどのわずかな部分であり、土坑が1基検出されました。土坑は県道側の調査区外へ延びてゆくため、規模等については不明ですが、土師器羽釜のほか瓦などが出土しています。また、この土坑の遺物は、今回の調査で出土した遺物量の大半を占めています。

V郭 県道部分の第1次調査の第V郭に相当するもので、今回の調査区で最も広い平坦面をもつ郭です。平坦面の面積は現状で170㎡あまりで、II郭との比高差は3.5mほどあります。全体に遺構は少なく、そのほとんどは県道側に集中しています。出土遺物はII郭に



V郭（調査前）

比べると極端に少なくなり、遺物が出土した遺構は県道側の土坑2基のみで、土師器皿・羽釜、陶器皿・甕、土鍾などが少量出土しているだけです。

VI郭 調査区の最下部に位置する小さな郭で、西側の約半分は過去の開発によって調査前に消滅していました。

4. まとめ

峯治城跡は、過去3回にわたる調査によって、日常雑器が多く出土していることから、平時の生活をともなった居館の色合いが強いことが指摘されています。今回は峯治城跡の縁辺部の調査でしたが、こういった部分にも生活の痕跡が認められることがわかりました。

（村木一弥）



II郭・V郭（完掘後）



峯治城跡遺構配置図(1:1,600)

遺跡紹介⑬ 長谷山古墳群

津市の西方にそびえる長谷山は、津市と安芸郡安濃町、美里村にまたがる標高321mの独立丘陵で、市のランドマーク的な存在として親しまれています。この長谷山山麓には、450基をこえる古墳が築造されており、県下有数の古墳密集地帯として知られています。

長谷山山麓には30余りの古墳群があり、これらを総称して「長谷山古墳群」「長谷山群集墳」などと呼んでいます。そのうちの約6割の古墳が集中する津市から安濃町にかけての山の北東側、標高約100m前後の尾根筋には、大山田古墳群、坂本古墳群、丸岡古墳群、細山田古墳群など、6世紀後半から7世紀代に築造された大群集墳があり、これらは墳丘の分布状況から、さらに幾つかの支群に分けられています。

例えば、津市と安濃町の境界付近に位置する大山田古墳群は、A～Fの6つの支群に分かれ、特にA支群では、丘陵の緩斜面に横穴式石室や小石室をもつ直径7.5～25mの円墳が、墳丘と墳丘を接するようにして95基も築造されています。

長谷山古墳群では、この大山田古墳群A支群のように、数十基の小規模な円墳が1ヶ所にひしめくように築造されている古墳群もあれば、数基の円墳が尾根上に1～2列に並んでいる古墳群もあり、古墳群の群構成はバラエティーに富んでいます。

ただ、長谷山古墳群の全てがひとつの集落の古墳群であるとは考えがたいこと、古墳群が支群単位でまるで共同墓地のような様相を呈していることなどから、長谷山古墳群は安濃



遺跡位置図(1:30,000) [国土地理院『津西部』1:25,000より]

川・^{あなぐら}穴倉川・^{いわた}岩田川流域に居住していた複数の集団が、墓域を長谷山に求めた結果であり、各支群の形成には、古墳を造った集団ごとに墓域という意識があったものと考えられています。

また、長谷山古墳群の大半は、石室をもつ直径10m前後の円墳ですが、なかには直径20～30mとやや大きく群内の盟主的な古墳も存在しており、墳丘規模の差は古墳造営集団内における被葬者の階層差の一端と考えられています。

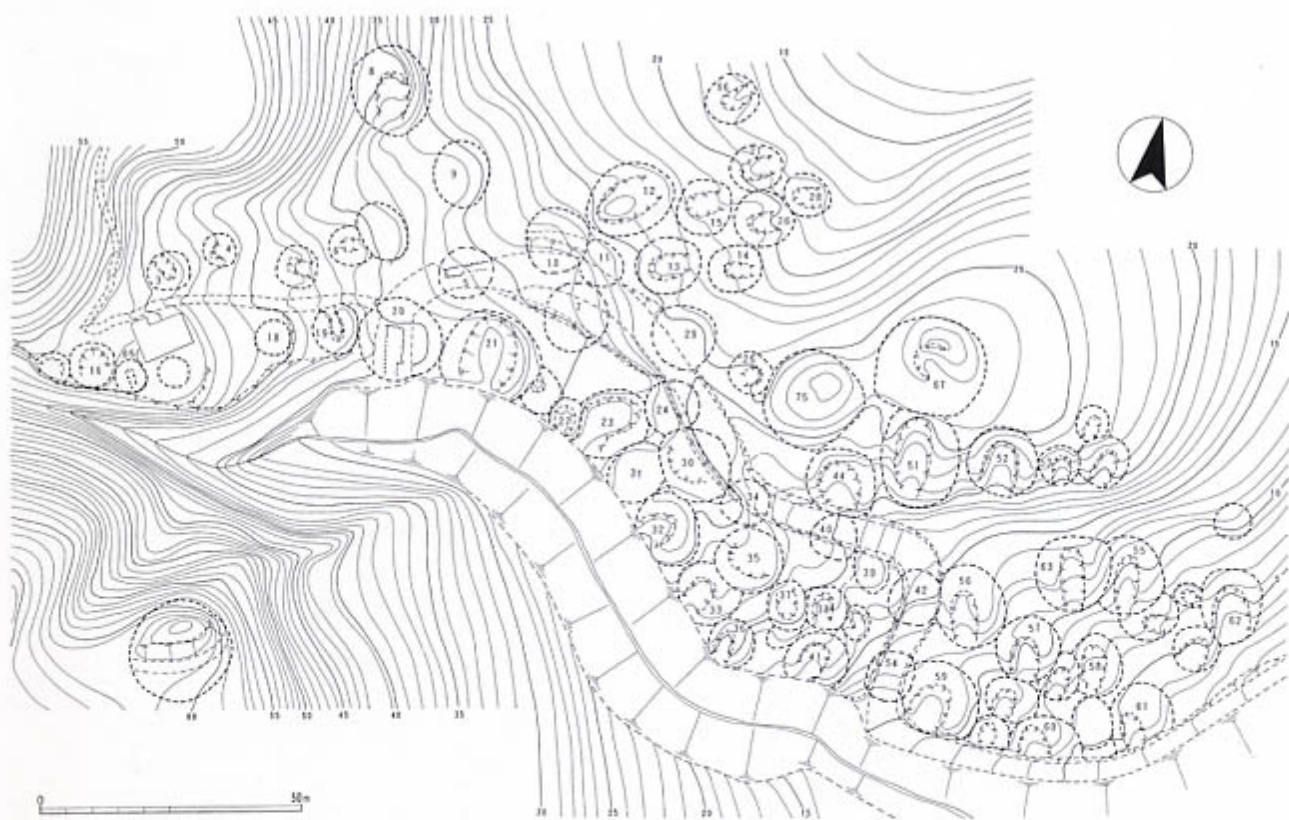
ところで、長谷山山麓からのびる低丘陵には、^{とのむら}殿村古墳群や^{おやしき}御屋敷跡古墳群のように全長30m前後の前方後円墳を核とする古墳群、^{ひらた}平田古墳群のように5世紀後半から7世紀末まで古墳と土坑墓が120基以上も築造され続ける古墳群、メкса古墳群のように6世紀前半の数基の小規模な方墳からなる古墳群など、長谷山古墳群に先行する古墳群が小地域ごと

に築造されています。

それが6世紀後半になって、突如として多くの集団が小地域をこえ、なぜ長谷山に墓域を求めることになったのでしょうか。その背景にはいったい何があったのでしょうか。長谷山古墳群の形成は、まだまだ大きな謎につつまれています。
(藤田充子)



長谷山全景（北東から）



大山田古墳群A支群 古墳分布状況（番号は古墳号数、等高線の高さ(m)は標高ではなく任意のもの）

（小玉道明「三重県津西部長谷山古墳群の研究—大山田古墳群A群発掘調査報告—」『研究紀要』第5号
三重県埋蔵文化財センター 1996より転載）

寄贈資料紹介② 大林日出雄氏所蔵考古資料

平成16年9月、大林茂樹氏から当センターに故大林日出雄氏所蔵の考古資料をご寄贈いただきました。大林日出雄氏は高校教諭、三重短期大学非常勤講師として教鞭をとられるかたわら、昭和31年(1956)の高井古墳(片田井戸町)の発掘調査(『埋文センターニュース』第13号参照)や『伊勢片田村史』の編纂など、郷土の歴史・文化の顕彰活動、三重県の近代史研究に精力的に取り組まれ、長く本市文化財保護委員、三重県史編さん専門委員をつとめてられました。

ご遺族から寄贈いただいた考古資料は、鉄刀1点、須恵器1点、陶磁器類2点、石鏃5点、銅鏃1点、銅銭10点、合計20点にもおよび、このなかには『伊勢片田村史』(以下、「村史」という)に掲載されて出土地が明らかな



遺跡位置図(1:40,000)(国土地理院『津西部』1:25,000より)

資料も幾つか含まれています。そこで今回は、寄贈いただいたものの中から特に村史に掲載された資料を紹介します。

市の西郊に位置する片田地区には、岩田川に



大林日出雄氏所蔵考古資料

沿って開けた小平野とその周囲の丘陵に多くの遺跡が存在しています。この村史は昭和29年(1954)の津市と旧安濃郡片田村の合併記念事業として編纂がすすめられ、昭和34年に刊行されました。かつて遺跡は開墾などによって破壊されることが多かったのですが、片田地区では村史の編纂により、旧村内から出土した資料が散逸することなく今日に伝えられ、この地域に暮らした先人たちの生活の営みを知る貴重な資料となっています。

鉄刀片 桐狭間1号墳(片田田中町)出土

刀身はかなり錆が進行していますが、切っ先から約46cmが残存しています。村史によると、この鉄刀は墳丘の北側が崖崩れした際に出土したと記されています。

桐狭間古墳群は、岩田川右岸の標高約30mの丘陵突端に築造された2基の円墳からなる古墳群で、墳丘の詳細は明らかではありませんが、1号墳からはこの鉄刀とともに須恵器や土師器、埴輪の破片が採集されています。埴輪には器面に線刻のある形象埴輪の小片(『埋文センターニュース』第11号参照)が含まれていることから、1号墳は6世紀前半頃に築造されたものと考えられます。

須恵器高杯(1) 片田井戸町字榎木出土

この高杯は、註記によると昭和28年(1953)に榎木地内の丘陵から出土したもので、村史には出土状況などは伝えられていませんが、この高杯とともに須恵器杯片や鉄刀片が採集されたとあります。また、榎木地内からは、昭和31年にも須恵器杯蓋(『埋文センターニュース』第17号参照)が採集されています。

しかし、現在のところ榎木地内でこれらの須恵器につながる遺跡は発見されていません。この辺りにも開墾や自然災害などで消滅してしまった古墳があったのでしょうか。

白磁四耳壺(2) 片田志袋町字坂本出土

肩に四つの把手が付き、にぶい灰緑色の釉薬がかかったこの壺は、中国で12世紀末から13世紀初頭頃につくられた白磁四耳壺です。

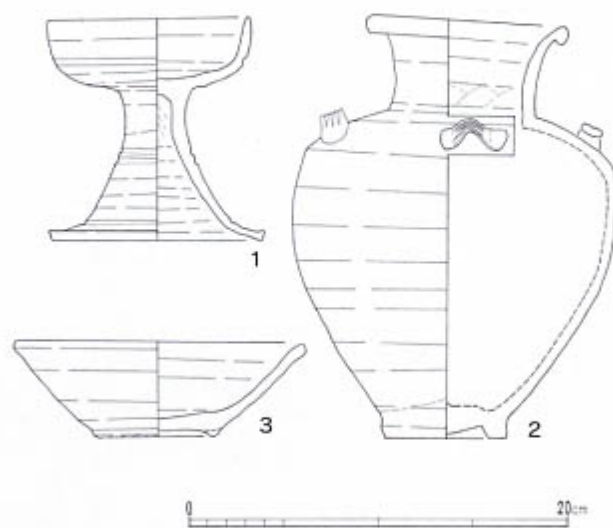
村史には字坂本地内の丘陵南麓から、開墾によって人骨が入った壺や甕が数個と五輪塔の一部が発見されたとあり、「坂本中世墓」と紹介されています。遺物の出土状況や中世墓の正確な位置など、この遺跡の詳しいことはわかりませんが、この壺は蔵骨器として13世紀中頃に使われたものと考えられます。

また、坂本中世墓から200mほど東の眺望の良い丘陵の尾根上からは、昭和44年の坂本山古墳群の発掘調査の際に坂本山中世墓(『埋文センターニュース』第5号参照)が発見されており、5基の中世墓から瀬戸産の四耳壺、常滑産の壺・甕、土師器鍋などが蔵骨器として多数出土しています。

陶器碗(3) 片田志袋町字森添出土

ひろく山茶碗と呼ばれているこの中世期の陶器碗は、村史によると森添地内の竹藪で発見されたとあります。また村史には、森添地内の山麓では竹藪の土入れの際に、弥生土器、土師器、須恵器など、相当量の遺物が出土したと記されています。

このように、ご寄贈いただきました資料は、地域の歴史文化を伝える貴重な資料として、当センターで大切に保管し、また有効に活用していきたいと考えています。今後も埋蔵文化財保護にご理解・ご協力を賜りますようお願いいたします。(藤田充子)



遺物実測図(1:4)

埋文センターこの1年 ～埋文センター日誌抄～

- 4月8日《見学》NHK文化センター「考古散策」20名
 20日《見学》神戸小学校 75名
 ♪ 《普及》「春のつつじ号郷土教室」講師(中央公民館)
 22日《普及》「春のつつじ号郷土教室」講師(中央公民館)
- 5月7日《見学》鈴鹿国際大学(博物館学講座)9名
 14日《見学》一身田小学校 92名
 19日《普及》寿大学講師(豊里公民館)
 26日《普及》寿大学講師(豊里公民館)
 27日《見学》総合的な学習(西郊中学校)13名
 29日《普及》「親子ふるさとウォーク」講師(片田公民館)
 31日《調査》白塚町地内工事立会
- 6月9日《貸出》川北遺跡出土陶器碗・藤谷窯跡出土土簡埴輪片
 (鈴鹿国際大学博物館学講座)
 15日《普及》出張講座(育生小学校) 87名
 22日《見学》市政教室(南が丘家庭教育講座)48名
 28日《見学》市政教室(橋南再発見グループ)40名
- 7月5日《見学》市政教室(橋南再発見グループ)44名
 11日《見学》市政教室(一身田公民館女性学級)35名
 15日《普及》出張講座(敬和小学校) 20名
 16日《普及》出張講座(敬和小学校) 20名
 20日《見学》伊勢平氏研究会 15名
 22日《見学》みえ社会保険センター 30名
- 8月10日《調査》平木遺跡工事立会
 13日《普及》坂本古墳群案内(龍谷大学文学部)17名
 20日《調査》里前遺跡工事立会
- 9月1日《普及》寿大学講師(橋北公民館)
 8日《貸出》野田出土銅鐸レプリカ
 (四日市市立博物館・川崎市市民ミュージアム)
 15～17日《普及》職場体験(南が丘中学校)3名
 17日《調査》大古曾遺跡工事立会
- 9月21日《調査》安濃津遺跡群隣接地工事立会
 22日《調査》中鳶遺跡工事立会
 28日《普及》「つつじ号秋の郷土教室」講師(中央公民館)
- 10月中 《普及》市政が「開発と遺跡の保護」放映(ZTV)
 1日《普及》「つつじ号秋の郷土教室」講師(中央公民館)
 8日《普及》「つつじ号秋の郷土教室」講師(中央公民館)
 14日《普及》選択教科講師(南が丘小学校)
 18日《見学》安濃小学校(安濃町)39名
 ♪ 《見学》市政教室(藤方老人いきいきクラブ)30名
 28日《普及》選択教科講師(南が丘小学校)
- 11月5日《普及》選択教科講師(南が丘小学校)
 8日《見学》市政教室(敬和公民館)30名
 10日《調査》西里の上遺跡試掘調査
 11日《普及》選択教科講師(南が丘小学校)
 14日《見学》東777の古代文化を考える会 25名
 16～18日《普及》職場体験(西郊中学校)3名
- 12月7日《調査》前ヶ谷遺跡工事立会
 1月20日《見学》市政教室(三重県市町村職員年金者連盟)40名
 20～24日《調査》山の脇遺跡試掘調査
 2月1日《調査》垂水A遺跡工事立会
 14日～《調査》峯治城跡発掘調査
 15日《見学》市政教室(押加部クラブ)35名
 19日《普及》考古学ゼミナール 22名
 26日《普及》 ♪ 20名
- 3月5日《普及》 ♪ 20名
 10日《見学》市政教室(みえ長寿津支部)35名
 19日《普及》寿大学講師(中央公民館)
 17日《見学》市政教室(みえ長寿津支部)48名
 19日《見学》歴史発見ウォーク(西橋内文化・スポーツクラブ)
 22日～《調査》中鳶遺跡試掘調査

《編集後記》

今年度は、調査件数と施設見学件数が大きく伸び、その対応に追われるうちに1年が過ぎていきました。まさに光陰矢のごとし…

津市に埋蔵文化財センターが設置されて10年、来年度は市町村合併をひかえ、また新たな一步を踏み出すことになります。

(編集子)

発行日：平成17年3月31日

編集・発行：津市埋蔵文化財センター
〒514-0058

三重県津市安東町1225

TEL 059-229-0210

FAX 059-229-4601

印刷：共立印刷株式会社